

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

じょう どう
成 道

平成28年12月第1週放送

「成道」とは、お釈迦さまのおさとりのことをいいます。

お釈迦さまは、十二月八日におさとりを開かれました。その後、ただひとり坐り、静かな時間を楽しんでいました。しかしその時、次のように思ったのです。

「わたしが今さとった事は、とても深く、捉えがたく、さとりがたく、賢者のみよく知るべきものである。しかし人々は、欲を楽しみ、欲を喜び、欲に踊っている。その人々には、この縁起の法は見がたく、この涅槃の法はさとりがたいであろう。もしわたしが、それを説いたとしても、人々はわたしの言うところを了解せず、わたしは疲れ切ってしまうであろう……。」

このようにお釈迦さまは、人々に教えを説くことをためらったのです。

このお釈迦さまのためらい自体に、おさとりの方向性があらわれていると思います。

私たちは普段、「自分」が無条件に存在し、確実なものであると考えています。この「自分」は、確固たる「自分」があると思って生きています。

しかし、お釈迦さまがさとった「縁起の法」は、私たちのこの考えと正反対のものでした。

それは、「自分」とは、さまざまな“縁”や“条件”がかさなって、はじめて存在しているものだから、無条件に確実な存在ではないということ。それゆえに、「自分」は常に変化していて、変化しているからこそ、永遠に変わらない確固たる「自分」がある、ということはない。

まさしく、私たちが普段思っていることと、異なる視点を持つ教えです。お釈迦さまが、人々への説法をためらったのも無理はないかもしれません。

しかし、お釈迦さまはためらいの後、人々にそれを説くことを選びました。

お経には、梵天という神がお釈迦さまに説法をお願いする、という物語として描かれています。

この梵天は、お釈迦さまの慈悲の心を表しているものだと考えられるでしょう。

それはきっと次のようなものだったに違いありません。

「わたしのさとった法は、人々の心にすぐには届かないかもしれない。それには多くの困難を伴うことだろう。しかし、この法は苦しみを除くものであり、苦しみを

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

にある人々は多くいるだろう。ならば、この法を伝えよう。」

お釈迦さまの決意は、強いものでした。

それは、その後四十五年にわたる、布教の日々が証明しています。

このお釈迦さまの決意があるからこそ、今私たちは、仏の教えにふれることができるのです。そして、その教えは、はじめは受け容れがたいものであるかもしれないけれど、私たちの心に新たな風を吹きこむものであるということを、成じょうどう道の日にあたり、感じていきたいものです。

— 終 —